

## 宝塚少女歌劇—大正・昭和初期のエンターテイメント空間—

橋寺知子（関西大学 環境都市工学部）

はじめに

宝塚歌劇は 100 年を超える歴史があり、熱心なファンがいることで知られているが、京阪神では、勤務先の慰安行事や福引の景品等で、観劇の機会を得ることも多い。筆者も、子供の頃から何度となく宝塚を訪れたが、幼い時は劇場より宝塚ファミリーランドの方が印象深く、中学・高校生になれば、年に 1、2 回、夏休みなどに友人と当日券を求め、観劇した覚えがある。宝塚歌劇は、華やかな夢の世界でありながら、お小遣いで行けなくもない、身近で庶民的なエンターテイメント空間だった。この印象は、宝塚歌劇という仕組みを作り出した小林一三の狙うところであったのかもしれない。松本コレクションには、宝塚少女歌劇の初期から 1950 年頃までの宝塚歌劇の SP レコードが多数含まれている。2021 年 12 月に開催された報告会では、その中から数曲を演奏し、歴代の劇場に着目しつつ、当時のデザイン潮流や風俗も合わせて検討することで、宝塚歌劇の空間を音と画像で追体験することを試みた。本稿はその発表内容をもとに、昭和戦前期までの宝塚歌劇の空間について、松本コレクションに含まれる楽曲を参照しながら報告する。なお、宝塚の開発や、宝塚歌劇が近代日本の音楽・演劇界に与えた影響等については、先達たちによって多角的に研究されている。それらに学びつつ、松本コレクションの音曲の助けを借り、当時の宝塚歌劇の空間を追ってみたい。

### 宝塚新温泉の開設<sup>1)</sup>

宝塚は、武庫川岸に湧出していた鉱泉をひいて 1892 年に温泉が作られ、阪鶴鉄道（現在の JR 宝塚線）や箕面有馬電気軌道（現・阪急電鉄）が開通し、賑わうようになった。1910 年 3 月に箕面有馬電気軌道が開業、梅田—宝塚間と石橋—箕面間が開通した。小林一三は終点の箕面と宝塚に遊興地を設け、乗客の増加を図った。武庫川右岸の既存の宝塚温泉とは別に、小林は新たに左岸の埋立地に宝塚新温泉を計画した。1911 年 5 月に開業した新温泉は、新しい時代の、家族で楽しめる遊興地を目指し<sup>2)</sup>、大理石造の大浴場や瀟洒な家族温泉を設けた。古写真には、従来の温泉のイメージとは全く異なる洋風の建物が写っている（図 1）。川島智生の論考<sup>3)</sup>には、設計施工の大林組所蔵の図面が掲載されている。木造平屋建てで、壁面はハーフティンバーの軽快な意匠である。図 1 の左の建物が、車寄せと玄関、休憩室のある本館で、中庭を挟んで浴場棟（図 1 では右側）があり、2 棟は渡り廊下で接続されている。浴場棟の 2 本のドーム屋根をいただく小塔が目立つが、これは浴場の湯気をぬく蒸気抜きである。ハーフティンバーの壁面は、装飾的要素が賑やかな急勾配の屋根とあいま

って、「洋風のリゾート地」のイメージを示しているように思える<sup>4)</sup>。

1912年7月にはさらに洋館の娯楽館を増築し、「パラダイス」と命名された。パラダイスの外観写真を見ると、ゴシックの聖堂のように正面両側が塔状になっており、横縞が目立つ幾何学的な意匠である(図2)。窓は円形や半円を少し超えた形をし、アール・ヌーヴォーやセセッションなど、20世紀初頭に流行したデザインの影響が感じられる。先に竣工した建物が大きな勾配屋根でロマンティックな意匠であったのに対し、パラダイスは幾何学的なシルエットで、白く明るい壁面が目立つ。明るく新しい雰囲気求めたように思える。

パラダイスの主要な施設は室内水泳場であった。室内プールと言えば、年中使える温水プールを連想するが、このプールには水を温める機能はなく、プールとして使える期間は短く、また当時は男女共泳が許されず、十分には使われなかった。平面図を見ると、玄関から入るとすぐに広いプールの空間があり、脱衣室はプールの奥にあるという、動線を考えるとあまり上手くないつながりになっている。脱衣場はロッカーで区切った仮設的なもので、プールと脱衣場の間には舞台のプロセニウムのような枠取りがある(図3)。この室内プールは、もともと閑散期には脱衣場を改修して舞台に、プール部分の水を抜いて客席とし、催し物の上演等に供する計画だった<sup>5)</sup>。プールとしての利用は、翌年には断念された。

#### 宝塚少女歌劇の誕生

宝塚新温泉が開業し、日帰りで楽しめる新たな行楽の形が模索された。今は新温泉跡に温泉はなく、後に設置された動物園や植物園、遊園地もなくなり、「宝塚歌劇の本拠地」のイメージしかないが、宝塚歌劇は、そもそも新温泉の余興として生まれたものである。当時、東京では三越で少年音楽隊などが結成され、好評を博していた。小林一三はそれにヒントを得て、パラダイスで上演する余興として少女16名の宝塚唱歌隊を結成した。1913年には宝塚少女歌劇養成会を設置し、1914年4月に第1回公演を披露した。1919年1月、宝塚音楽歌劇学校が設立され、小林一三は校長に就任する。宝塚少女歌劇養成会は生徒と卒業生で組織される宝塚少女歌劇団(現・宝塚歌劇団)が正式に誕生した。

#### パラダイス劇場と公会堂劇場

1914年、最初の公演が行われた場所は、室内プールを改造して作った劇場で、パラダイス劇場と呼ばれた。1914年4月の第1回公演は、歌劇「ドンブラコ」、喜歌劇「浮かれ達磨」、ダンス「胡蝶」の3本立てで実施された。パラダイス劇場での上演風景(図4)を見ると、プール部分が客席に変わっていることがわかる。プール周囲の床の意匠はそのままである。松本コレクションには、第1回公演の録音盤はないが、パラダイス劇場で上演された演目のレコードも数枚含まれている。一番古いものは1914年10月に上演された「音楽カフェー」の録音である(図5)。

同年3月には新歌劇場が竣工した。新劇場は、通称「公会堂劇場」と呼ばれる<sup>6)</sup>。この公会堂劇場は、箕面駅の南側に箕面有馬電気軌道が設けた公会堂を移築したものである。小林

は、箕面有馬電気軌道のもう一つの終点、箕面駅周辺の経営にも積極的であったが、明治末ごろからは、宝塚新温泉の経営に集中することとし、箕面の諸施設をの経営を順次他社へ譲り、公会堂も閉館した状態であった。竣工当初、公会堂劇場客席は、中央部は栈敷、側部は椅子席だったが（図6）、翌1920年10月には中央部も椅子席に変更された。2つの劇場が稼働できるようになり、少女歌劇は2部制が始まり、1921年10月には花組と月組が誕生し、組制度が始められた。

2劇場となり組制度が始まってからのSPレコードとしては、花組による1921年8月公演のお伽歌劇「めくらと象」や1921年9月の月組公演「邯鄲」などが松本コレクションには含まれている。

#### 小林一三が演劇に求めたもの

小林一三は、鉄道事業を中心に住宅地や遊園地、ターミナル・デパートの経営などを多角的に取り組み、鉄道利用者に新しい時代の新しい暮らしを包括的に提供した存在である。日本の演劇といえば、歌舞伎や人形浄瑠璃があり、明治以降は新劇や西洋直輸入のオペラなども上演され、伝統と革新の間でさまざまな様態の演劇や音楽があった時代である。小林は文化人としても有名だが、演劇についても一家言あり、従来の劇場を掌握しつつあった松竹の方法や劇場建築を批判している。小学校で唱歌に親しんだ人々に受け入れられる新しい演劇・音楽を目指すべきであり、廉価で上質な舞台芸術を提供する劇場空間を目指し、「大劇場主義」を唱えた。観覧料を下げるには、一度の公演をできるだけ多くの観客で共有する必要がある。宝塚新温泉での試みは、始まりは温泉の余興であったかもしれないが、小林の演劇観を体現するものでもあったと言える。観覧料は他の劇場の相場に比べれば、非常に低価格で、新温泉の入場料等を合計しても一円に満たなかったと言う。初期の2劇場は、改修や移築によって作られた劇場で、華美な意匠や高価な用材を競うことなく、合理性を求めた空間と思える。小林は、自身が唱える大劇場主義にかなう新劇場をさらに構想していた。

1923年1月23日、宝塚新温泉の諸施設は、火災により浴場以外のほとんどの施設を焼失した。小林一三は、近い将来、新劇場を建設する構想を抱いていたが、計画を前倒しし、復興を急いだ。驚くことに、同年3月には、竹中工務店の設計施工で新劇場が竣工した（翌年、中劇場と改称）。急がせた建設であったせいも、この劇場に関する資料は多くないが、1924年に発行された『竹中工務店 承業式拾五年記念帖』に外観写真が掲載されている（図7）。掲載されたデータによれば、木造2階建、舞台下地下階付（最要主部鉄骨）建坪247坪、延坪435坪である。外観写真では、切妻屋根の三角形の破風部分に縦縞が入っているのが唯一のデザインの要素のように見える。松本コレクションには、この中劇場での2番目の公演、花組による児童用神話劇「すくなびこな」と歌劇「龍井寺由来」、喜歌劇「蘇生」の録音が含まれている。

#### 宝塚大劇場の完成

翌 1924 年には、宝塚大劇場（初代）が、旧公会堂劇場の跡地に竣工した（図 8）。中劇場に続き、竹中工務店の設計施工である。この劇場は、客席数 4200、立ち見も入れると 5000 人収容できる大劇場であった<sup>7)</sup>。当時、東京の歌舞伎座や帝国劇場は 1800 人程度、世界的に見てもシカゴ・オーディトリウムやベルリンのグロッセス・シャウスピールハウスぐらいで、宝塚大劇場は世界最大規模の劇場であり、まさに小林一三の「大劇場主義」を実現した空間であった。外観写真を見ると、装飾等は簡素で、華やかさや豪華さはあまり感じられない。劇場内部は、客席は横長の配置で椅子が隙間なく並び、舞台のプロセミアムも、客席の大きさに合わせてかなり幅広いことが見て取れる（図 9）。天井は客席前方から後方へ円弧を描くように高くなる形状をとっており、広い劇場空間に合わせ、音が遠くへも到達するよう工夫された。4000 人を収容するために 3 階席まであるが、無柱では支えられず、1 階席後方に 2 階席を支える柱がある（図 10）。世界最大級の収容人数を可能とすると同時に、復旧を早く遂げなければならない使命もあった。劇場そのものは簡素で合理的であることを第一に求めたように思える。1920 年代は、モダニズムのデザインが登場する一歩手前の頃であり、装飾の幾何学化や全体的な抽象化が進んでいた。小林の思いだけではなく、時流にあったデザインでもあった。竹中工務店は、意匠や構造のプロが集う設計部の育成に力を入れていた。この時期は、意匠では鷺尾九郎が統括、構造設計では京大卒の藤井彌太郎が在籍し、宝塚大劇場を担当している<sup>8)</sup>。日本有数の大規模劇場を短期間で建設するには、設計施工の利点を生かす組織力が役割を果たしたと思える。

ここまで、劇場建築の変遷とともに紹介した演目は、どちらかと言うと和風のものや、子ども向けの童話のようなタイトルが多かった。宝塚歌劇で上演されるジャンルはとても幅広いのだが、「レビュー」と呼ばれるショーの華やかさが、まさに宝塚歌劇のイメージではないだろうか。海外のような華やかな演目が登場するのは、昭和初期からである。宝塚歌劇には、初期から専属の演出家が在籍し、オリジナル作品を生み出してきた。洋行し、海外の舞台やショーを実際に見聞した演出家たちによって、新規性のあるショーが作り出された。日本最初のレビューは、岸田辰彌の帰朝第一作の「我が巴里（モン・パリ）」（1927 年 9 月初演）である。岸田は 1926 年 1 月に欧米へ出発し、約 1 年半、滞在した。続いて白井鐵造が 1928 年 10 月に旅立ち、帰国後制作したのが「パリゼット」（1930 年 8 月）である。「モン・パリ」以上に人気が出て、3 ヶ月続演された。この「パリゼット」の主題歌が、今も歌い継がれている「すみれの花咲く頃」である。松本コレクションにも、この時期の華やかなレビューの記録盤が多く含まれる。

1935 年 1 月、また宝塚は火災に見舞われた。1 月 25 日、宝塚大劇場から失火し、劇場内部のほとんどを失う大きな被害であった（図 11）。だが再び驚異的なスピードで復旧工事を成し、同年 4 月 1 日には公演を再開している。『建築と社会』1935 年 8 月号に「宝塚大劇場復興工事」と題し、竹中工務店の鷺尾九郎が難工事の顛末を書いている<sup>9)</sup>。昼夜 3 交代で夜間も照明を灯し、工事を進めたとある。座席数は少し減少したが、ほぼ以前と同様に復旧した（図 12、図 13）。

## 1935年4月星組公演「春のをどり流線美」

復興した大劇場での最初の公演は、4月1日初日の星組公演で、「春のをどり流線美」を中心とした演目であった。この公演のポスターを見ると、中央に大きく「春のをどり」と書き、そのそばに「復興なった新劇場で時代の寵児流線型の新案をどりは流線をどり」と添えられている。

この演目の振付は、上方舞榎茂都流の三世家元で、日本舞踊で重要な役割を果たした榎茂都陸平であった<sup>10)</sup>。榎茂都は1931年2月から1934年3月の間、欧米に留学している。1930年代前半は、特にアメリカはアール・デコの全盛期で、ニューヨークにはクライスラービルなど超高層ビルが竣工し、インテリアや服飾の世界でもアール・デコのデザインが流行していた。ロックフェラー・センターのラジオシティ・ミュージックホールは1932年に柿落としを迎え、ザ・ロケッツのラインダンスで有名な「クリスマス・スペクタキュラー」が始まったのは翌年である。

「春のをどり」は、日本舞踊等で親しみあるタイトルだが、「流線美」という文言が取り入れられている点は、この頃のデザイン界でのアール・デコの隆盛との関連が感じられる。アール・デコは幾何学的な装飾やジグ・ザグ、ストリーム・ライン（流線）、メタリックな素材の使用などを特徴とするデザインである。またアール・デコは「ジャズ・モダン」とも呼ばれる。「春のをどり流線美」の主題歌は、ジャズの軽快なリズムが印象的で、歌詞では「流線」という語が繰り返され、スピード感に満ちた都会的な感覚がよく表れている。1930年代、宝塚歌劇のレビューでは、ジャズのリズムが多用されている。松本コレクションのSPレコードにおいても、演奏者として、「宝塚少女歌劇管弦楽団」だけでなく、「宝塚ジャズオーケストラ」あるいは「宝塚ジャズバンド」と記した盤が多く含まれている。

1940年代になると、時流の反映か、「大東亜共栄圏シリーズ」（1941-42年）や「鵬翼」（1942年）などが松本コレクションのリストに見られるものの、枚数は少なくなる。1944年3月に大劇場が閉鎖されるまで、歌劇団は興行を続け、また各地へ慰問に出向いた。戦後、劇場の接収が解除されたのは1946年2月で、同年4月には大劇場での公演を再開している。

おわりに

本稿では、松本コレクション所蔵されたSPレコードのうち、宝塚少女歌劇に関するもの

### 春のをどり流線美 主題歌

#### (1)

春だ踊りだ 踊りだ春だ  
今年や流線 流線美の春だ  
花は咲いた咲いた 流線美の都  
空にや流線 海にも流線  
町にや流線 山にも流線  
走る車が これ又流線  
流線に明けて 流線に暮れる  
だって流線の春だもの

#### (2)

春だ踊りだ 踊りだ春だ  
今年や流線 流線美の春だ  
人は出た出た 流線美の都  
彼も流線 彼女も流線  
背広は流線 ドレスも流線  
喋る言葉が コレ又流線  
お雛様さへ 流線に変わる  
だって流線の春だもの

に注目し、その草創期から昭和初期のモダン文化が花開いた時期までの宝塚歌劇を振り返った。宝塚に出現した劇場は、小林一三の演劇に対する考え方が影響した空間であるが、20世紀初期のモダンな文化が花開いていく時代を体現した空間だったと感じられる。劇場そのものには、過大に投資せず、華やかさや豪華さを誇示せず、されど劇場にはひとときの夢の時空間があったように思う。SPレコードに刻まれた楽曲も合わせて聴くと、都会から少し離れた行楽地で育まれた、阪神間モダニズムの芸術空間が立体的に浮かび上がるように思える。

#### 注

- 1) 宝塚新温泉については、安野彰：遊園地・宝塚新温泉が形成した娯楽空間の史的理解、市史研究紀要たからづか、第20号、1-42、2003年、安野彰：明治末から昭和初期における宝塚新温泉の経営方針の形成について、日本建築学会計画系論文集、第79巻第702号、1809-1817、2014年に詳しい。
- 2) 安野(注1)によれば、新温泉開設当初は芸妓の踊りの披露など、従来の男性向けの娯楽も見られたようだが、1913年の婦人博覧会の開催や、他社の類例施設との差別化を図ることから、女性や家族連れが楽しめる場所づくりが図られた。
- 3) 川島智生：宝塚新温泉の成立とその建築について—小林一三の理念と新しいビルディングタイプの誕生—、市史研究紀要たからづか、第19号、29-64、2002年
- 4) ハーフティンバーは、1873年日本最古の公立公園として開園した浜寺公園の最寄駅、南海電鉄・浜寺公園駅(辰野金吾・1907年)でも用いられている。
- 5) 小林一三は、プールが上手くいかなかったので劇場に改造したと述べているが、仕方なく改造したのではないことを、安野や川島は前掲論文で指摘している。
- 6) 公会堂劇場については、資料が少なく詳細ははっきりしない。内部を撮影した古写真があるのみである。中央部が栈敷になっており、初期の様子を写したものと思える。天井にはガラスの照明器具があり、洋風だが、栈敷のせい、伝統的な木造の芝居小屋の雰囲気がなくもない。
- 7) 宝塚大劇場に関しては、オーディトリウムとしての史的意義を探る研究として、中川雅登：宝塚大劇場の日本劇場建築史上における意義、日本建築学会九州支部研究報告、第41号、445-448、2002年がある。本節での記述はこれに多くを負っている。
- 8) 松隈章：竹中工務店建築写真帖 解説、写真集成近代日本の建築19(竹中工務店建築写真帖第4輯)、104-105、ゆまに書房、2015年
- 9) 鷺尾九郎：宝塚大劇場復興工事、建築と社会、第18輯第8号、8-16、1935年8月
- 10) 榎茂都陸平および「春のをどり」「流線美」については、桑原和美：榎茂都陸平と藤岡宏の二つの『流線美』をめぐる考察、就実論叢、第43号、75-90、2014年に詳しい。

#### 参考文献

- 『阪神急行電鉄二十五年史』、阪神急行電鉄株式会社、昭和7年
- 『宝塚歌劇廿年史』、宝塚少女歌劇団、昭和8年
- 『宝塚歌劇四十年史』、宝塚歌劇団出版部、昭和27年
- 『宝塚歌劇五十年史』、宝塚歌劇団、昭和39年
- 『宝塚歌劇の70年』、宝塚歌劇団、1984年
- 渡辺裕：『宝塚歌劇の変容と日本近代』、新書館、1999年
- 高木史朗：『レビューの王様：白井鐵造と宝塚』、河出書房新社、1983年

[図版]

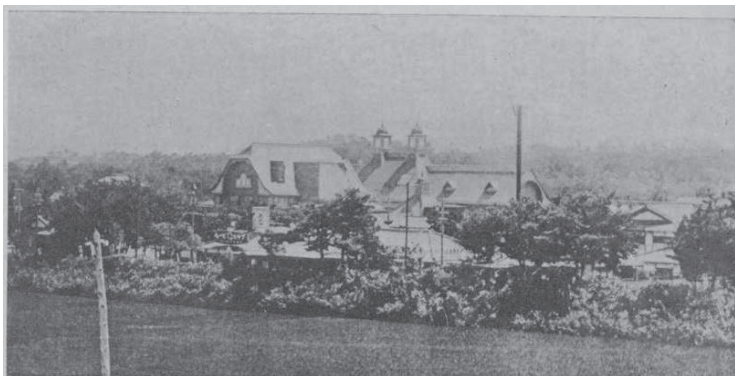


図1 開業時の宝塚新温泉（1911年）＊1



図2 パラダイス（1912年）＊1

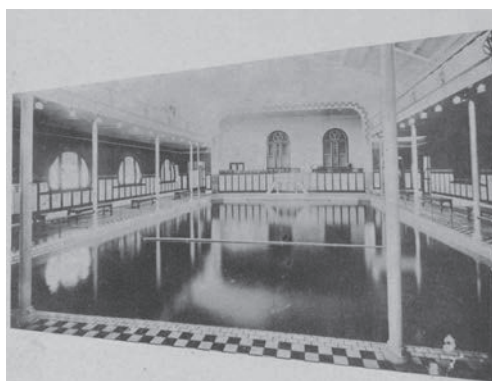


図3 パラダイス1階室内水泳場 ＊1



図4 パラダイス劇場（1914/4 歌劇「宝船」）＊2



図5 「音楽カフェー」（1914/10 パラダイス劇場）＊1

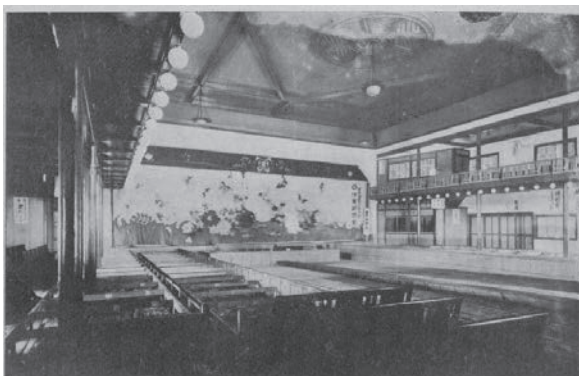


図6 公会堂劇場 内部＊1

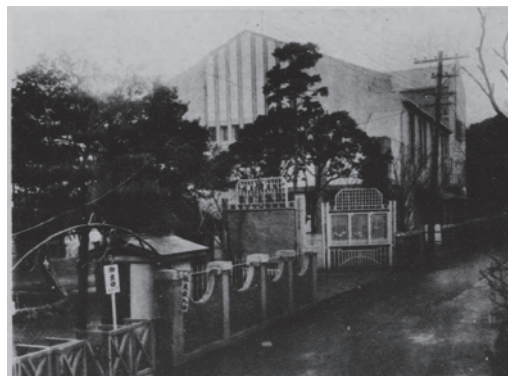


図7 中劇場（1923年）＊3



左奥に中劇場、中劇場と手前の武庫川の間には新温泉開設時からの唯一の建物・大浴場が見える。

図8 大劇場竣工（1924年）＊1

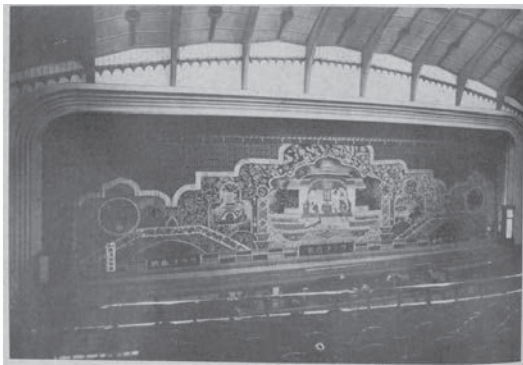


図9 大劇場 舞台＊1

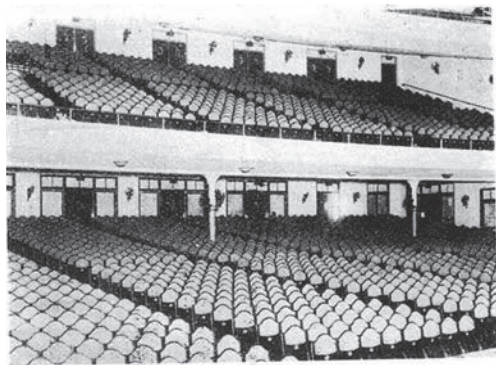


図10 大劇場 客席＊4



図11 壁を残して焼失した大劇場（1935/1）＊5

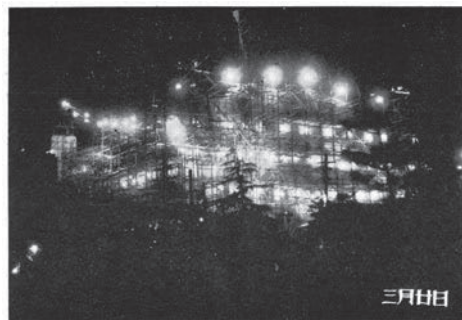


図12 復興工事中の大劇場＊5

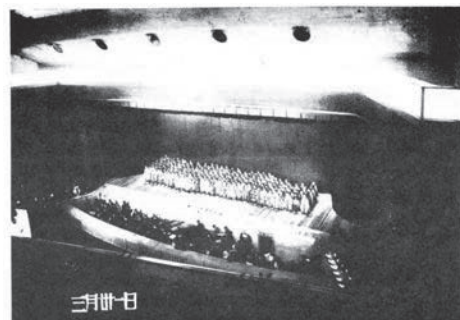


図13 公演前日リハーサル（1935/3/31）＊5

図版出典

- \*1 『宝塚歌劇廿年史』、宝塚少女歌劇団、昭和8年
- \*2 『宝塚歌劇四十年史』、宝塚歌劇団出版部、昭和27年
- \*3 『承業貳拾五年記念帖』竹中工務店、大正13年
- \*4 『建築と社会』、第18輯第2号、1935年2月
- \*5 『建築と社会』、第18輯第8号、1935年8月